

# ドラメリア覚書



- 1 お休み
- 2 気がつけば
- 3 バスの記憶
- 4 本屋さんの思いで
- 5 コッコの思い出
- 6 うなぎ
- 7 時報
- 8 マッチ、または経験のないこと
- 9 夢と原稿
- 10 赤煉瓦の日々
- 11 大人になること
- 12 電話
- 13 親知らず
- 14 宿題のはなし
- 15 顔がないはなし
- 16 問いつめられる話
- 17 お酒の話
- 18 仕送りの話
- 19 隣人のはなし
- 20 猫と枕のはなし
- 21 シュシュのはなし
- 22 迷子のはなし

- 23 十二年目のはなし  
 24 スイカ  
 25 ミス研のはなし  
 26 お休み  
 27 お休み  
 28 たまごのはなし  
 29 熊のはなし  
 30 なりたい話  
 31 猫と座布団  
 32 飛ぶはなし  
 33 リラックス生活  
 34 桜のはなし  
 35 すごい服  
 36 フォークダンスの思い出  
 37 脚立がこわい  
 38 映画のはなし  
 39 魔女と靴下  
 40 湯たんぽのはなし  
 41 春の帽子  
 42 ママチャリ  
 43 歳月のはなし  
 44 片想い

- 45 黒ときどき青赤  
 46 さよなら元気で  
 47 駅前通りの憂鬱  
 48 こどものわたし、大人の私  
 49 いつも、何度でも  
 50 拾うひと  
 51 おみやげと替え玉  
 52 拾うひと その二  
 53 流星群  
 54 あいさつ  
 55 猫は力カオを食べない  
 56 バナナ牛乳

## 気がつけば

気がつけば、座敷わらしになっていた。今もなっている、らしい。

しかし、最初からこうだったわけではない。灯りに引き寄せられて、何となく居心地が良くて、そのままここに留まっている。

格別、福をもたらしたりはしていない。気儘に過ごして、時折店の隅にぼうつと現れることもある。時々、ささやか  
に役に立つことをする。しかし自分としては、便宜上姿を  
現さなければ立ち行かないときだけ、ふらりと現れたいの  
で、見かけてもそつと見えない振りをしてほしいと思  
う。



## バスの記憶

鮮明に憶えている。

このところ雨が続いていたので、何度かバスに乗る機会があった。バス停でふと懐かしい色合いの車体が目に止まる。薄たまご色のボディに、オレンジと緑のラインが入った野暮ったいデザイン。私の生まれた町を走るバスだ。

その後も乗る機会がほぼなかったもので、私のバスの記憶はあれからほとんど更新されていない。今でも、あの色のバスを見ると、道の向こうの違う世界へつながっているような気がする。

昔、あのバスに乗れば違う世界につながっていると思っていた頃があった。四歳だった私は、入院中の母を訪ねて、何度もあのバスに乗った。当時の私の世界は徒歩二分の保育園と家だけで構成されていて、大きな国道のこちら側で終わっていた。その先にあるのは、知らない「あちら側」の世界で、バスはそこへつながるたった一つの鍵だった。

あの頃のことはおぼろげな記憶しかない。手をつないだ姉のセーターの編み目と、祖母のきびしい横顔、冷たい風の感触。ただ、こちらへ近づいてくるバスの顔だけを

## 本屋さんの思いで

「恩田陸の小説を読むと、わくわくしながら物語を読んだ子どもの頃を思い出す。自分の読書の原点なんだ」と言った人がいた。読書の原点。……私にとつての原点はどこだろうか。

田舎のちいさな町に育ち、身近にある本屋さんは、定有堂よりずっとせまい大型施設の中のお店ひとつきり。今思えばとてつもなく不自由だが、そういうものだと思っていれば、特に不便も感じず、学校帰りに毎日のように通った。

当時の私のバイブルは、ハヤカワ文庫の目録だった。おそらく、町で一番読み込んでいる高校生だったと思う。海外ミステリーにハマって、並んでいるハヤカワ文庫(HM)を一冊ずつ買っていくうちに、本屋のおばちゃんに「そんなに好きなら、これでも見たら」ともらったものだ。それを頼りに、「海外ミステリーの金字塔!」「不朽の名作!」などグツとくる紹介文が書いてあるものを一冊ずつ注文

した。

なにしろ二〇年前のことだ。本が届くまで、気が遠くなるぐらい時間がかかった。待つて、待つて、その挙句に「ごめんね、品切だつて」と返事が来たらまだいいほうで、宙に溶けてしまったのかヤギに食べられたのか、うやむやのまま忘れ去られたものもあつた。

……しかしそれだけ待つたからこそ、やっと届いた、その一冊の最初のページを聞く瞬間は特別で、震えるような胸の痛くなる期待感を、今でもはつきりと覚えていいる。振り返ってみると、あの気持ち私読書の原点かもしれない。

## 音信不通 (五)

### コッコの思い出

来年は酉年だ。

子どもの頃、犬、猫、ウサギ、文鳥、とさまざまなペットを飼ったが、何度か鶏も飼ったことがある。いずれも、買ったたり貰ったたりしたのではなく、父親が道で拾ってきたものだ。

当時は、家のそばの国道を、鶏を運搬するトラックがよく走っていた。荷台では、ぎつちり詰め込まれた鶏たちがわさわさ動いていて、車が走り去った後の道路には白い羽毛がふわふわと散っていた。上から下まで鶏、鶏、鶏……という荷台の眺めは壮観で、「あ、ブロイラーのトラック！」と子どもたちで言い合ったものだ。

その荷台からこぼれ落ちた一羽が道端をうろついているところを、迷っている小動物を必ず保護してしまう困った癖のある父親が、つい拾ってしまったものらしい。(それは大丈夫なのかと今振り返ると思うが、古き良き昭和の

話ということでご容赦願いたい。) ずっとは飼えないんだろうなということとは子供心にもぼんやり悟っていたので、焼き鳥、とか唐揚げ、とか今思えばひどい名前を付けて、子供らしく気まぐれに世話をした。鶏は数週間飼われた後、どこかに引き取られていった。養鶏をしている知り合いがいたので、おそらく、本来の運命に近い流れに戻ったのだろう。

家のそばの道を通るとき、ここをコッコが歩いていたのかな、と不思議な気持ちになることがある。私自身は遭遇したことがなかったが、この目で見て見たかっとなと思う。

## 音信不通（六）

うなぎ

先日、うなぎを食べた。定有堂で開かれている読書会の恒例行事、忘年会のことだ。ほとんど貢献らしいこともしておらず、しかも読書会そのものには一度も参加したことがないというのに、ここ数年ひっそりと端のほうで「黙ってうなぎを食べている」。幸い、座敷わらしとして定着しているの、何故ここにいるのか、と問われたり、難しい話を振られたりするのではない。

参加しているのはここ四、五年だろうか。時々不思議なゲストを迎えることもあるが、おおむね顔ぶれに変化はない。場所も毎年同じ店で、なんともう二五年近くも続いているらしい。そう聞いて驚いた。

出るたびに話題にのぼるのが、「うなぎが年々小さくなっている」という話だ。正直なところ、私には違いがまったくわからない。気のせいではないか…と思いいいやいや、と思ひ直す。五年程度では明確な差異が出ないのかもしれない。

ない。これが、さらに十年後には、「たしかにちいさくなっている！」と思うのだろうか。謎だ。そんなことを考えながら、いつもうなぎを食べる。とても美味しい。来年のこの日が楽しみだ。

## 時報

### 音信不通（七）

先日、行きつけの中華料理店で知った顔に会った。窓口で不特定多数を相手に仕事をしているので、街で常連に会うことは多い。愛想よくしておこうと会釈をすると、「シユツとした桑田圭祐」風のビジネスマンは、やや戸惑ったようにこちらを見た。おや違ったのかな、じゃあ何関係の知り合いだったろうかと考えながら食事をし、帰り間際に思ひ出す。

ああ知り合いではなかった、彼は毎朝の「時報」だった。朝の通勤時のことだ。信号の多いメインストリートを避けて自転車で走る途中、繁華街の通りを横断する。その通りの向こう側で煙草を喫っているのが彼だった。

どれだけ寒くてもゆったりと煙草を味わう彼は、吸い終わるとその後しばらくニコチンの余韻を愉しみながら（？）佇み、最後に私の来た道を少し下って、どこかへ姿を消す。毎朝きつちり同じ時間に行動する彼は出勤時間を

計るのに最適で、その一連の行動のうちどこで彼とすれ違ったかで、何時ごろ職場に着くかがわかる。まだタバコがその手にあれば、青信号。動いている彼とすれ違おうと黄色信号。姿を見なければ、赤。急げ！

店を出ながら、もう一度最後に目で挨拶をする。わかっ  
てはいても、だつて朝すれ違っただけじゃないか、と向こう  
は思っているかもしれない。やはり少し戸惑った表情だっ  
た。いやいや、と心の中で言い返す。私にとつてあなたは  
大切な時報なのです、と。

## マッチ、または経験のないこと

今までの人生で一度もやったことがないこと、というのは沢山ある。チャージ型のICカード乗車券(いわゆるイ○カなど)を使ったことがないし、スマホも持っていない。株の売買も未経験だ。ラーメン屋に一人で入る。整体。のど自慢への出場。趣味を含めれば、それはもう無限に、星の数ほどある。

その中で、「普通の人はやったことがあるし、難なくできるんじゃないか」と思えて、気軽に口には出せないことが長年ある。正確には、あった。マッチで火を点けることと、コインランドリーを使うことだ。(ひとり暮らしを始めた頃は、「ATMからお金をおろす」ことも含まれており、お金を引き出すには暗証番号というものが必要である、ということをもっと知らなかった)

コインランドリーは使ったことがない。今の住まいに落ち着くまで、賃貸住宅ばかりを四度、転々と引っ越したが、

毎回、洗濯機を置けるところを選んだ。ひとロコンロ、ユニットバス、エレベーターなし、と学生時代はいろいろ妥協したが、洗濯機だけは譲らなかつた。コインランドリーに通うマメさはないなと思ったからだ。結局、いまでも経験しないままだ。ちなみに、コイン精米機もない。これまでの数十年やらずに生きてきたことは、よほどの状況がなければ手をつけないものだ。

ところが、マッチについては、昨年ついにデビューした。学校時代はするすとかわしてきたのだが、仕事柄、定期的にマッチでロウソクに火を点けねばならない行事があるためだ。しかもお客の前で。チャッカマンではダメでしようか、と先輩に伺いを立てたが、穏やかに、しかしきっぱりと却下された。絶対に、マッチ！

こっそり猛練習し、おかげで、問題なくできるようになった——傍から見ると手つきが危なっかしいらしく、お客に「頑張つてね」と励まされてしまったが、この年になつても、新しくできるようになることがあるというのはいいものだなあ、と妙な感慨をおぼえた。



## 夢と原稿

### 音信不通（九）

職場での雑談で、「睡眠時間が短いのでは」という話になった。概ね、十二時〜深夜一時頃就寝、五時半起床という生活を続けているが、それを言うと、たいいていの人に驚かれる。よく足りるね、日中に疲れないか、と心配されたりもする。あまり驚かれるのでふと不安になり、一、二週間ほど日付が変わる前に寝るよう心がけてみた。ちよつとした実験のつもりだった。

寝つきはいいので入眠は早い。しかし、どうもムダに夢を見ているような気分に陥った。特別悪い夢というわけではないが、断片的な日常が中途半端にリアルだ。次の日に予定されている行事の司会をしたり、同僚と会話をしていたり。その時々で心のどこかに引っかかっていることが、ひよっこりと顔を出すのだろう。

一番最近、昨夜見た夢は、この原稿についてだった。別れ際、編集長に「早く書いてね」と圧力をかけられたから

だろう。しかし私は、無事に書き上がった原稿を提出していたりはしておらず、「鞆を溝に落としたので、原稿は書けなかった」とよくわからない理由を懸命に言い募っていた。前後の脈絡は不明だ。自分でもよくわからない。鞆を溝に落とせば、原稿は待つてもらえるのだろうか。

## 赤煉瓦の日々

### 音信不通（十）

で弁当や缶コーヒーを買いに行っていた身からすると、便利でうらやましい限りだ。  
短くて長い時間をここで過ごした。夢があつたけれど、知れば知るほど、はたしてそれを叶えられるのかと不安になつていった。長期休暇中は、同じ目標を持つ友人たちと公共図書館でのアルバイトに精を出した。今は交流を持つことは少ないが、当時の仲間たちは概ね同じ分野で仕事をしているようだ。

十数年ぶりに母校の大学を訪れた。  
メインキャンパスから少し離れた校舎へ向かつて、その頃と同じように細い裏道をたどる。小学校に入学したばかりの子供が高校を卒業するまでに匹敵する年月が過ぎたわりには、風景は驚くほど変わっていない。角を曲がった瞬間目に飛び込んでくる自動車学校の看板。執筆者になると高額ギャラが貰えるらしい、講義ノートの販売店。一周回ってむしろ新しいとさえ感じる、レトロ感満載なデザインのパーマ屋（美容院ではなく、頑としてパーマ屋と言いたい）。どれもかつて見慣れた景色だった。

一方、キャンパス自体はかなり様変わりしていた。年代を経てくすんだ色味だった赤煉瓦の建物はとてつもなく立派になつていて、眩しさに目が潰れそうになる。お洒落になつた構内にはカフェまでできていた。教授の使い走り

当日は人前で話す用があり、講義室の壇上から学生をひとわりと眺める。概ね就職を控えた学生たちが参加する催しだが、前列にひとり、一回生だろうか、緊張した顔つきで聴いている女子学生がいた。まだよくわからない部分も多いのだろう、時々疑問符が宙に浮かんでいるのが見えるようだ。

頑張つて。  
心の中で呼びかける。  
あなたの夢も、叶うときが来るよ。



## 大人になること

ああ私も大人になったもんだよ、と感じたできごとがある。(もちろん、十数年前に成人しており既に立派な大人であることは間違いないのだが。)

メガネからコンタクトレンズに変えて、およそ一年になる。もともと、視力はそれほど良くない。以前の小さな職場ではそれでも何とかなっていたが、今度の職場は広いのでそうもいかず、しぶしぶ変えたのだが、これが実に快適だ。視界の端を区切っていたフレームがなくなるだけで、世界はこんなに広くなるものかと感動した。最初こそ無防備な眼に指でレンズを入れることに恐怖を感じたが、慣れると装着もごくスムーズにできるようになった。

ただし、いくつか誤算もあった。日中の気軽な付け外しが難しいこと、基本的にそのまま寝てはいけないこと、そして、毎日のケアが必要であること……これが面倒だった。夜帰宅し、一分でも早く寝たいときにこすり洗いをせね

ばならない煩わしさ。かといって、あまりおざなりにすると、自分の眼の健康が不安になる。

しばらくの間、夜遅くなるときは一日用、通常は二週間用……などと使い分けていたが、ついうつかり、それなりの値段がする二週間用のものを思い切りよくゴミ箱に捨ててしまつてから、決心した。もつたいない、実にもつたいないが、この時間と手間をお金で買おう、と。

バス代二百数十円を惜しんで何キロも歩いていた頃を思えば、なんと大人になつ(てしまつ)たことだろうか。若者の日々ははるか彼方だ。

# 電話

## 音信不通(十二)

子どもの頃、「テレビ電話」は未来のすごい技術の象徴だった。電話で相手の顔が見えるんだって？　なんて便利な！

話は変わる。先月、ついに携帯電話をスマホに替えた。アスファルトの路面に落とせばいいかそれとも軽く水没したからか、長年使っていたガラケーがよいよ壊れたからだ。

使い始めておよそ三週間。必要に迫られて通話に使ったりはしたが、思ったより聴き取りづらい。通話のような基本機能は、飛躍的に性能が良くなったりはしないのか。スマホ初心者あるあるだが、指が滑って「ワン切り」電話を何回かかけた。

それにしても、自分が予想どおり、いや予想以上に使わないことに少し驚く。通信量は三週間で〇・八GB。契約プランは三GBを選んだが、あまり必要なかったかもしれない。

ない。便利なものを手に入れても生来の不精は変わらな  
い。しかしまあ、スマホにしようかと考えたときに思い  
浮かんだのは「旅行や出張のときにナビや乗り換えが便利  
になるかも」だったので、そのとき満を持して活用すれば  
いいのだ。そう自分を納得させる。

少し困るのは、スマホに換えたことを知った実家の父親  
が、LINEをしようと誘って来ること。新しいもの好き  
でどうにスマホ導入済みの父親は、「テレビ電話もできる  
んやで！　簡単やで」と実に熱心にアピールしてくる。

……いやいや。実家に電話するのに、身なりを整えてか  
らするだって？　ご冗談を。電話のいいところは顔が見え  
ないところだよ。

## 親知らず

音信不通(十三)

先日、親知らずを抜いた。

かつて大学生だった頃にも一度抜いたことがある。そのときは人生初の抜歯にかなり身構えたものの、何事もなく順調に回復した。何しろ二十歳頃の話だ、身体も若かったのだろう。

一丁前に疲れた社会人になって体験した今回は、なかなか大事だった。そもそも一晩中痛みに転げまわった後のことで、余計に影響が大きかったのだろう。

一番困ったのは食事だった。まず、熱があるので食欲はない。しかし、薬を飲むためには何か胃に入れなければならぬ。けれど、腫れと痛みで固形物はまったく食べられない。「あら、食べられないなら、スープを飲めばいいじゃないの」という声が聞こえてきそうだが、指一本分も口が開かず、可哀想な自分へのお見舞いに買ったひと口大のフルーツが口を突破できないことに愕然とする。具沢山の

贅沢なスープは食べられず、飲み下すだけの液体とゼリーで一週間を過ごした。世の中のゼリーは、ほとんどが薄甘いもしくは酸っぱいフルーツ味の味付けなのだなどということと、「十秒チャージ」が売りのゼリーパウチは、吸い込む動作が可能な健康な口腔の持ち主のためにあるのだなあとしみじみ悟る。この二週間近く、私はいつぱしのゼリー専門家だった。

ようやく落ち着いて笑い話にする余裕ができたところで、職場で一連の顛末を話したところ、「自分も近々親知らずを抜く」という人が周囲に二、三人いて驚く。この職場は、何か親知らずの活動を促進させる菌でも空中を浮遊しているのか。もしそうだとしても、術後の食事は安心してほしい。隣に、ゼリー専門家がいるのだから。



## 宿題のはなし

音信不通(十四)

八月もいよいよ終わりが近づき、職場の大賑わいも終息を迎えたようだ。ひと息、といったところ。

毎年、学校が夏休みに入ると、職場には宿題を抱えた親子で溢れかえる。「自由研究のテーマが決まらないんです」「読書感想文を書くのにお薦めの本、ありませんか」……などなど、実に様々な問い合わせを受ける。それにつけても感心するのは、みんな早い時期に宿題に手を付けるのだなあ、という点だ。

自分を振り返ると、宿題や勉強を計画どおりにやらない子どもだった。「やらない」ではなく「できない」が正しいだろう。一見、物事をコツコツ進めていく真面目な性格に見られがちだが、中身はかなりいい加減なほうなので、毎日何かを続ける根気がない。当時から、いかに楽をして宿題をやったことにするかに尽力していたような気がする。友人がやったものを写させてもらうのはもちろんのこと

と、筆跡がよく似ている隣のクラスの友人のレポートを、表紙を取り換えて提出したこともある。

しかしそんな小細工が及ばない課題中にはあって、実技系はその最たるものだ。提出日の明け方までかかって、静物画を描き上げたこともあった。(夜であたりが見えなかったので、風景画はやめた)

宿題にギリギリまで手を付けない性格は、大人になっても改善されなかった。そのため、こうしていつも締切間際に原稿を仕上げる羽目になるのだ。

## 音信不通(十五)

### 顔がないはなし

このところ雨の日が多く、自転車通勤する身には不便だ。徒歩やバスなど他の方法で行けばよいのではと思われそうだが、本を詰め込んだ鞆が重いので、三十分も歩きたくない。バスは直通ルートの便がないため、行程の半分近くを歩かなければならず、どうにも運賃がもつたいない気がする。

あれこれ考えあわせた挙句、「ここはKP(カップ)しかないだろう」という結論に落ち着き、レインポンチョを着用することにした。しかし、問題がひとつ。顔は守れないのだ。

KP通勤の先輩に訊いてみると、「いやあ濡れるけど、拭けばいいし……」とこだわりのないサラリとした笑顔。ジテツウ仲間の女子と思わず顔を見合わせる。いやいや、そんなわけにはいかないでしょ、朝から顔なくなっちゃうじゃない……。

さらにあれこれ工夫をして、ポンチョ+透明バイザーでびったりと顔周りを守る。目的には適っているが、形は完全にてるてる坊主で、どう鼻屑目に見てもお洒落とは言いがたい。知り合いに会っても、他人のふりをしよう。そう心に決めてKP通勤に励んでいたある日、見かけた知人から更に衝撃的な目撃情報もたらされた。

「黒いポンチョに顔だけ出て、なんだか走るカオナシみたいだったよ！」

カオナシ。走るカオナシ……！ あまりにインパクトの大きなその言葉に、しばし戦いた。

## 問いつめられる話

### 音信不通(十六)

毎年のことだし必ずしも秋冬に限ったことではないけれど、唇が荒れてあれて、しょうがない。特に乾燥する冬の時期がひどい。

あまりにもがさがさになってしまっているので、ぼんやり考え事をしているときにささくれだった箇所につい触れてしまい、それが刺激になってまたむけるといふ悪循環。傍から見るとずいぶん痛そうな唇をしているのだからうなと思っただけ、けっして無頓着なわけではない。クリームも医薬品も色々試してみるが、効果がないだけで。

その印象が強いのか、五歳になる姪っ子からのお便りには、常に「もうくちびるむかないでね」と書いてある始末。お盆や年末年始に顔を会わせると、毎回約束を破っていないか聞いただされ、ごめんね約束破っちゃったんだ……と真っ正直に告白した日には、「どうして? どうして約束破るの? ねえ、どうして?」とくまの子も真っ青のなぜ

なぜ攻撃を受け続ける羽目に陥る。

どうしてと言われても、無意識だから理由はないんだ。大人はついやっちゃうことがあるものなんだ、そこをわかってほしいんだ。

だから、お誕生日カードにまで書いてくるのは、どうかやめてほしいんだ。



## お酒の話

### 音信不通(十七)

中では一番強い。残りの人々は、2cm飲んだら寝ている。お酒が美味しい人生というのはどんなものなのだろうか……、時々思ったりもするけれども、体質ばかりはいかんともしがたい。まあ、父親から甲殻アレルギーを受け継がなかっただけ、よしとするしかないのか。

海老、大好き。

めっきり寒くなってきたからか、しばらく探すのが困難だった甘酒が、また店頭に並ぶようになって嬉しい。甘酒好きな私はほくほくしながら買いだめに走るが、ときどき失敗して「酒粕使用」と書いたものを買ってきてしまい、あとで「しまった」と頭を抱える羽目になる。

おばあちゃんっ子だった私にとって、味は昔懐かしい、石油ストープにあたりながらちびちび飲んだあの味で好きなのだが、どうにも体がアルコールを受け付けない。どうやら我が家の人間には、アルコールを分解する酵素がほとんど備わっていないようだ。

夏場に世間の皆が「くっしみる！」と気持ちよさそうに叩る発泡麦茶の味も、鳥取の美味しいお米で作られたこだわりの地酒の味もわからない。「苦い炭酸だな」「酒の味がするな」程度にしか感じるものがない。

もつとも、缶ビール半分までは消費できるので、家族の

## 仕送りの話

### 音信不通（十八）

数日前、クリスマスプレゼントをいただいた。箱に入った食料多めの品揃えに、ふと既視感をおぼえる。「田舎のおかんからの仕送り」風でもあるけれど、もつと違う何か……そうか、あれだ。

昔、お金持ちが多い私立大学に行っていたわりには貧乏で、卒論が追い込みに入った頃、PCが壊れて危機的な経済状況に陥ったことがあった。貯めたバイト代は自動車学校に注ぎ込んだばかり。奨学金は家賃だし、と当座削れるところは食費しかなく、米も乾麺も尽きてからは、当時1個65円（←）のハンバーガーでひと月近く凌いだ。コンビニのパンより、あれが一番安くてとりあえず一食分になったのだ。しかしさすがに栄養が足りず、階段を上がるのも苦勞するほど体力が落ちた。

すると、指導を受けにいくたびにげっそりしていく私を見かねたのか、ある日、ゼミの教授（ドイツ人・カント倫理学専

門）に「これを食べなさい」とそつと紙袋を渡された。中を見ると詰め込んであったのは、ソーセージ、缶詰、レトルト食品など食料品の数々。ああこんな風に親切にしてくださいさるんだ、全然良い学生でもなかったわたしに……と何とも言いがたい気持ちになったのをよく覚えてる。

……どうしてこれを思い出したかというところ、頂いたプレゼントのお助け食料的なラインナップもあるけれど、このところ、「ありがたいけど、どうして親切にしてくださいさるんだろう」と思うことがいくつもあった。自分はそれに値するような何かをその相手に与えられてはいないし、返す機会も訪れないんじゃないかなあと感じる。

けれど、それならまた別の誰かに手渡していったらいいのかもしれない。そうやってつないでいくものなのかも……と想ったりもする。

## 隣人のはなし

先日、初めて隣人と会話をした。めずらしく通路で顔を合わせたので、挨拶だけして通り過ぎようと思ったら、「すみません、いつもうちのがうるさくて」と向こうから声をかけられる。

隣人男性は昨年の春に入居した比較的新しい住人なのだが、犬を一頭飼っている。これが正直なところ、かなりやかましい。ペット可の集合住宅だから、普通の賑やかさなら許容範囲だ。斜め下に住む大型犬「ユキコちゃん」も郵便配達人が通るたびに番犬の資格十分な声で吠えている。

ところが、これが四六時中、それこそ夜中の2時だろうと早朝5時だろうとおかまひなしにクンクンキャンキャン騒がしく、しかも2LDKでスペースは十分あるというのに、よりによって私の居住空間に近い壁際で吠えられると……まあ心中穏やかならざるものがあつた。

そんなわけで、これまで普通に挨拶程度はしつつも内心マグマが煮え立っていたわけだが、話しているうちに「しようがないかな……まあお互い様だし」とだんだん思えてきた。「まだ一歳になったばかりで落ち着きがなくて。かわいいかわいはいばかりで、つい……すみません」と謝りながらも嬉しそうな様子や、見せられたツーショット写真の数々（ツーショット写真としか言いようのない構図だった）が、あまりに親バカ（犬だけ）丸出しだったせいもある。

顔が見える関係って大事だなあとしみじみ思う。相手がどんな人か、何を思っているのか。それがわかるだけで変わってくるものもある。仕事の上でもそうだ。

## 猫と枕のはなし

音信不通（二十）

二月二三日は猫の日らしい。ニヤーニヤーニヤー、だからだそう  
だ。あまり多くの人には言っていないが、猫を飼っている。二匹。

最近、疲れ気味で血迷ったのか、抱きまくらを買った。少し前  
にドラマで流行した、もちもちした手触りの動物型のもの。猫の  
話はどうしたんだと思われそうだが、ちゃんと関係はある。

気がかりだったのは猫のことだった。というのも、以前に人から  
プレゼントされた猫型のぬいぐるみに対する反応が激しかったか  
らだ。

それはとても精巧なぬいぐるみで、一見本物の猫かと思間違  
えるほどよくできていた。だからだったのだろう。年長の雌猫の  
方は、いつもじつとわずくまっつて動かない具合の悪い仲間（動物か  
らはそう見えたのだろう）を気遣い、優しく舐めて寄り添ってく  
れた。しかし、活発な年下の三毛猫の方は、同じ柄に敵愾心を  
燃やしたのか、私がそちらをかわいがっているように見えたの  
か、激しく攻撃。あるいは、やんちゃな時期だったから、激しいじ

やれあいのつもりだったのかもしれない。結果、顔が見るも可哀  
想な状態になってしまい、以後、防虫剤とともにクローゼットで  
眠っている。ぬいぐるみを繕う、神の手の持ち主が現れるのを待  
ちながら。

さいわい、今回はフォームが枕型だからか、それとも質感がふ  
さふさではないからか、彼らを刺激しなかったようだった。完全  
に調度品扱いだ。……あるいは、私への愛情が冷めたのか。だとし  
たら、少しさびしい。

## シユシユのはなし

シユシユを集めている。「シユシユ」が何かわからない人のために大辞泉で得た知識で説明すると、「輪になった筒状の布にゴムを通したもの。女性が髪を束ねるのに使う。」とある。こう聞くと、一度はご覧になったことがあるのではないだろうか。

後ろでまとめる今の髪型にして二十年。ひどいくせ毛のうえ不器用なのであまり自由な髪型もできず、変化をつけられるのは髪飾りぐらい。コレクター気質はあまりなく、シユシユ自体に特別愛着があったわけでもないのだが、普段使いのもの・冬向きの素材・スーツにも合うデザイン：…などなど集めていくうちに、だんだん数が増えてきた。さらに、今の職場に移ってからは、曜日ごとに服装のテーマカラーがあり（自主的に・ごく一部の間で）、それに合うものも揃えてみたりする。火曜日は緑、水曜日は縞、金曜日は青。

そうこうしているうちにシユシユの数はさらに増え、先日何気なく数えてみて驚いた。その数、実に七十六個。毎日付け替えても、二か月半は余裕で過ごせる。おまえには頭がいくつあるのだ！ と捨て神様に怒られそうだ。

ただ、一ついいところもある。シユシユに凝っていると周囲に知られることで、人から贈られる機会が増えた点だ。さほど値も張らず、好みもある程度把握しやすいので、贈る側も迷わず便利なのだろう。

そんなわけで、私に付け届けをされる際はシユシユがよろしい。というのが今回の結論。

## 迷子のはなし

先日、大阪で迷子になった。

元々重度の方向音痴だ。京都に住んでいた頃も、地下鉄の駅から地上に上がるとどちらが目指す方向かまったくわからず、とりあえず歩いてみたのはいいけれど、途中で案内表示に行き当たってみたら反対方向。ということがままたあった。しかし最近、何度か東京・大阪に出張の機会があり、複雑な乗り換えも首尾よくこなせたのに気をよくして、……まあ少し慢心していたのだ。

目指す施設のアクセスマップに、周辺の地図も印刷。大阪駅の改札を出て、いざ出発……したのだが。二文目の「動く歩道を左に見ながら進みます」という説明で既に迷子。左目で見たけれど、そこからどうすれば。違和感を感じつつ構内を出てしばらく歩いたところで、行き過ぎたことに気づいて本来の道へ合流するであろう脇道に入る。

……これがまずかった。料理音痴が適当に味つけしてはいけないように、方向音痴は道順にない経路を選んではいけなかったのだ。それから小一時間ぐるぐるするとさまよい続け、刻々と迫るイベントの開演時間。

進退窮まってついに禁断のグーグル先生を起動、道案内を開始。これでもう安心だと思った……。のに。道案内の指示どおり進んでいるはずなのに、ルートがどんどん変わっていく。そうか、わたしが間違っているのか。表示の残り距離がどうしても四五〇mから縮まらない。

どうにもならなくなつて最終的にタクシーに飛び乗り、開演時間にはなんとか間に合った。まあそうだよなあ、と今は思う。自室でこの原稿を書いている自分が、いまだちららの方角を向いているかもわからないのに。目印もない知らない街で目的地にたどり着けるわけがないよなあ。

## 十二年目のはなし

てくるようになった。思うに、あれが本人(猫) 渾身の就活アピールだったのだろう。効果は抜群だった。

そのいじらしさというかなりふり構わない必死さにほだされて、帰宅するその足で住宅会社に立ち寄り、猫を飼えるマンションへの引越しに取りかかった。今までの人生で最も思い切った決断だったと思う。

飼い始めてからはあつという間だった。住み替えた自宅は、坂を転がり落ちるように猫仕様と化した。猫の爪から壁を保護するシート、運動不足を解消するために階段状に配置した家具。私生活はほぼほぼ、猫で占められている。もはやニャンコ教からは逃れられない。……今回は、それだけの話。

六月で十二年になる。最初の猫を迎えると腹を決めてから。妙な表現だが、この時点ではまだ飼いはじめていなかった。出会ったのは、五月。近所のショッピングセンターの入口に住みつき、人懐こい仕草ですり寄ってくるので気になっていた。春は引越しの季節、恐らく捨てられたのだろう。こんな警戒心のない性格で危ない目に遭いやしないか。食べる物は十分にあるのか、……。

気にはなっていたが、その時点では飼うことまでは考えていなかった。生き物を飼うとかなりの覚悟がいる。行動も制限されるし、必要経費の問題もある。何より当時住んでいたのは、ペット飼育不可のマンションだった。この壁は高い。

あれこれ逡巡しているうちにその猫はどんどんなついてきて、しまいには餌もあげていないのに膝に乗って甘え

## スイカ

先日上京した際、スイカを初めて買った。果物（いや野菜か）ではなく、ICカード乗車券の方だ。もともと便利な道具や先端技術に疎い方で、カード一枚で用件が済んでしまうのがどうにも胡散臭くて信じられない。それで何度か都会に行った際も手を出さないうたのだが、いざ使ってみると実に快適だった。いちいち路線図と睨めっこして小銭をじやらじやら出し入れしなくてよいし、乗り換えもスムーズ。コインロッカーもこれをかざすだけで利用できる。「余ってしまったら、自動改札がない鳥取では使うアテがないじゃないか」と思っていたが、コンビニなどの買い物にも使えるそうだ。

それにしても、便利な世の中になったものだなあとつくづく思う。購入方法や使用方法があやふやだったので、某有名動画サイトでやり方を探してみたのだが、ちゃんと動画を作ってアップしている親切な人がいた。これに限ら

ず、名刺交換の方法や子ども向けの手遊びうたなど、ちよつとしたことのやり方を知りたいときに、同じように動画を探した経験がある。「すこしのことにも、先達はあらまほしき事なり」と昔から言うが、本当に少しのことなら、今は誰かに直接教わらなくても動画で教えてもらえるのだ。インターネット万歳。実にありがたい。

話は変わるが、先日「がぶりこ」という大栄町特産の黒皮スイカを食べた。甘くて種が少なく、外箱もちよつとお洒落でかわいらしかった。お察しのとおり「すいか」という音以外に何のつながりもない。

## ミス研のはなし

夏といえはミステリ。

大学生のとき、ミス研に入っていた。超常現象の方ではなく、推理小説研究会のほうで、そこでは毎年、夏にびわ湖合宿があった。

文化部、しかも実技系ではないサークルで一体何をやるのかと思われるだろうが、何もしない。三日間、安い大学の施設に泊まって、ミステリ好きな大学生がわいわいしているだけだった。リレー小説を書いたり、部員が書いた犯人当て短編を読んで推理したり。「ミステリで最も重視するのは何か」というお題で、「トリック」「ロジック」「物語」「探偵キャラ萌え(ー)」などに分かれて、論戦したり。同じ趣味を持つ仲間と過ごす三日間は楽しかったし、贅沢な夏休みだったなと今振り返ると思う。

ひとつ、心残りというか安堵したこと。当時隆盛を誇った新本格ミステリでは、大学生サークルが合宿に行くこと

体そこで事件が起き、更に外界との行き来が断たれて「犯人はこの中にいる！」状況に陥っていた。いわゆる「クロード・サークル」ものと呼ばれるジャンルだ。高校生の頃、ミス研に入ると事件が起きるのかなとぼんやり期待していたものだが、現実はそのようなことはなく、毎年何事もなく終了した。京都市内へ帰る車中で、おそらく部員の半数は思っていたのではないか。……事件、起きなかったな。

しかし、考えてみたら事件には犯人と被害者がいるわけで、誰も被害者にはなりたくない。起きなくてよかったのだ。



## たまごのはなし

たまごが好きだ。すこぶる好きだ。

いつ頃からそうなのか覚えていないけれど、卵料理をよく好んで食べているなあと思う。自分でも料理にとにかく卵を付けたがり、はっと気がつくときと和洋中間わず卵スープになっている。外で何か食べるときもそうだ。茶碗蒸しやだし巻き玉子が出るとほくほくしながらいただく。中華なら天津飯やカニ玉が食べられたら、もうそれだけで満足できる。

ファストフードなら断然月見バーガー。これは秋の一時期にしか出ない限定メニューなので、いつも九月が来るのを心待ちにしているのだが、今年は東京行きであわただしくしているうちに販売が終了していた。悲しくてしばらく落ち込んだ。

一番好きなのはオムライスで、食べ歩きにはほとんど興味のない人間だが、これだけは機会を逃さずあちこちに食べに行く。メニューがあればとりあえず頼んで、ここは昔ながらの薄焼きタイプ、こちらはとろとろ半熟タイプ。ソースはデミグラスにトマト、ホワイトソースとこだわりなく

どれも美味しく食べる。初めて入ったお店で最初のひと口をいただく瞬間がたまらなく好きだ。

ただ、これだけ好きでも、自分には本質的には貧乏舌なのだろうと思う。先日、パンケーキが人気で県内外からお客が押し寄せる卵料理のお店で、念願のオムライスを食べた。普通に美味しかった。が、卵の特別な味わいはまったくわからなかった。一パック八八円の卵とこのこだわり高級卵。両者で同じオムライスを作り目隠しをして食べたら、きつとわからないだろう。だが、それでいい。特別でない気軽さが、オムライスのいいところなのだと思う。

## 熊のはなし

音信不通（二十九）

最近、ときどき早朝に山に行く。山頂から明るくなつていく空を眺めるのが楽しいし、霧のわからない晴れた日は遠くに大山が見える。

しかし、登り口に立つ「熊注意」の看板が実に怖い。牙を剥き出して今にも襲ってきそうな熊のイラストが描かれていて、迫力十分だ。

わたしの実家は山のそばで、五十歩走れば山に飛び込める近さだったので、時々熊の話を目にした。実物を見ることはないが、山菜を採りに入った山道で痕跡を目にすることはあるので、まあいるよな熊、という認識だったと思う。そんな地域で熊騒ぎが起きたことが一度ある。「林のおばちゃんだと思ったら熊だった事件」。説明の必要もないそのまんまな事件で、家の軒下でござって居る後ろ姿を林のおばちゃんだと思ったら、なんと熊だったという。ここまで近くに出没したのは初めてだったので、当時、ニュースは「林のおばちゃん」というキーワードとともに地区中を駆け巡った。

……林のおばちゃんの名誉のために補足しておく、決

しておばちゃんは熊っぽいわけではなかった。上背のあるがっしりした体格ではあるが、いつもピンク色の割烹着を着ていて、普段なら当然見間違えたりはしない。ただ、目撃された時間帯が夕暮れどきで、薄暗がりの中では判別が難しかったのと、軒下に吊るした野菜を漁る姿に精を出すおばちゃんの姿が重なってしまったのだろう。

東京での研修の際に田舎エピソードとして披露したら「まさか、そんなことあるわけないよ」と信じてもらえなかったが、本当の話。当の熊は逃げ去って、以後姿を現していないらしい。

## なりたい話

音信不通（三十）

と彼女の母親（姉）から朗報がもたらされた。そうか、やはり小学校に通うようになるとお姉さんになるのね、それで何になりたいって？

と訊くと、意外な答え。

「てんのうへいか」。

……ううむ、斜め上。ついぞ、なりたい、なれるという職業カテゴリーで捉えたことのない存在。子どもって面白いなあとつくづく思う。しかも浴室で秘密の練習に励んでいて、大人には見せてくれないらしい。鶴の恩返しか。この年末に特訓の成果を披露してもらえるのを、ひそかに楽しみにしている。

幼い頃何になりたかっただろう。小学校に上がりたて頃は、ぼんやりと「お花やさん」「ケーキやさん」ぐらいを思い浮かべていたように思う。理由も「好きなだけケーキがたべられるから」とかそんなたわいもないものだった。今年小学一年生の姪っ子がなりたいものは、だいたい人外だ。初めは「おさるさん」で、理由も「いつでもバナナを食べられるから」だった。その次が「ちようちよ」。道端で卵をいくつも採ってきて飼育し、羽化までを観察するのが趣味の彼女は、イモ虫に実に詳しい。身体を丸めてじつとする「ぜんよう（前蛹）ちゃんごっこ」にさんさん付き合わされた。

この夏の最新版は「カエル」。カエルのどこにどう憧れたものか、自分のことを友達の前でも「ケロちゃん」と呼んでいるようで、大丈夫なのかそれ、一人称前呼びよりも痛いのは……と彼女の社会生活をひそかに心配していた。

そしてついに、なりたいものが人間にランクアップしたよ！

## 猫と座布団

音信不通(三十一)

先日、初めて高速バスに乗った。重度の乗り物酔い体質の私にしてはスムーズに目的地に着いたのだが、降りると身体が痛い。寝落ちして以後ほとんど身動きしなかったからか、車中が思いがけず寒くて筋肉が固まったのか、首も肩も背中もとにかく痛い。

ギシギシきしむ身体を伸ばしながら、時間潰しに入った大型雑貨店で、すごい座布団を見かけた。座布団……正確に言うと「骨盤サポートチェア」という商品らしい。椅子などに置いて座るだけで自然に正しい姿勢へ導き、腰の負担を和らげてくれるそうなの……なんといまはそんな便利なものが。座り姿勢を猛反省している最中だったこともあり、思わず展示品を試してみると、これが実に快適。腰がしつかりホールドされて楽だし、自然に背筋が伸びる。あまり気持ち良かったので、帰宅するなりポチッと買ってしまった。

待つこと数日、現物が手元に届く。……うむでかい。醸し出されるコックピット感。店内で見るよりずっと存在感があつてかさばる。これは運搬も大変だ。かつ窓口仕事で自分のデスクに日中二時間足らずしか着席しない私には、置き場所も悩みどころ。まさか自分と一緒に移動するわけにもいかない。あれこれ考えた挙句、ひとまず自宅に置くことにして、この原稿もそれに座って打っている。快適だ。

昨夜、ふと見ると猫がそこで寝ていた。彼女は姿勢の矯正など一度も考えたことはないだろうが、カーブした形状がフィット感があつていいらしい。ぴったりはまり込んでいる。和んだ。

## 飛ぶはなし

先日、ずいぶん久々に空を飛ぶ夢を見た。タイ旅行に行かれた知人の写真を見たからかも知れない。マハナコン・スカイウォーカー高さ三一四メートルの展望台にあるガラス張りの床は、まさに絶景。そこでポーズを取る写真はまるで空を飛んでいるようだった。(わたしは高所恐怖症なので、とてもあそこには上れないし上りたくもない)以前実家にいた頃は繰り返し見たものだが、近頃とんと見なくなっていた。ああ大人になっちまったのだな……、と思っていたので、少し嬉しくなる。

しかし、成長して身の程を知ったからか、内容はなにごら現実的を通り越しても悲しいものだった。まず、あまりに低空すぎる。歩いている人の頭のあたり。そして、スピードがのろい。ゼイゼイ息を切らしながら目一杯飛んで、人間が走るスピードよりちよつと速いかな程度。夢の中ぐらい、物理法則も何もかもすつ飛ばして、

もうちよつと爽快に飛行してもいいんではないか。というよりこれ、はたして飛ぶメリットはあるのか……？と目覚めてから自分でも考えてしまった。

この話をしたところ、ある人にこう言われる。「懸命に努力して、人より少し上を少しだけ早く。それもアリかも」。……なんといい解釈！

スマートに何でもこなせる人に憧れる。けれど、残る人生で到底その域にたどりつかないこともわかっている。いつもさんざんジタバタしている。そのジタバタ加減含めて、自分らしい飛び方なのかもしれない。

## リラックス生活

音信不通(三十三)

いつも力んでいるらしい。

先日初めて整体に行き、そこで言われた言葉だ。……あれ、どこかで聞いたぞこの台詞。

実のところ、ここ以外でもほうぼうで言われる。仕事では「適度に力を抜いて、自分だけで背負わないように」と忠告され、やっているスポーツでも「息を吐いてリラックス」と常に注意を受ける。正直なところ意外だ。そんなに緊張したり気負っている気はなく、普通に愉しく過ごしているつもり。もうひとつの頻出ワードは「真面目」だが、これはわからなくもない。実際はコツコツやるのが苦手なキリギリス型だが、見た目が地味なA型なのでそう言われがち。真面目そう、というのは「地味」のポジ変換マジックでしょう。

それにつけても、リラックス。パソコンに向かったまま、ためしに息をゆっくり吐いて、肩からそろそろと力を抜いてみる。……たしかにストンと力みが取れる。怖がりなの

で常に身構えているのだろうか。自分ではそれが常態になっているからわからないが、傍から見たら相当力んでいるように見えるのだろう。続けているスポーツではこれが課題で、何かしら方法を見つけて実践できなければ、壁は超えられないという自覚はある。

ためしに、「だんらり、ぐんにやり」をキーワードに日常生活を送ってみようか。なんだかだいぶニュアンスが違うが、最初は意識して大げさにやらないと定着しない気がする。なので、精一杯ゆるんでみよう。ある日わたしが溶けてバターになったら、「ああ限界まで頑張ってるんだな」と温かい目で見てやってほしい。

## 桜のはなし

音信不通(三十四)

今年は冬が暖かったせいで、桜の開花も早かった。改まったイベントとしてお花見に繰り出したりすることはなく、袋川沿いの桜並木を眺める程度で満足している。京都に住んでいた頃も近所のお寺の桜を眺めるぐらいしかしたことがなく、今にして思えばもったいないことをしたなあと思わなくもない。

京都の桜と聞くと思い出すのが、合格電報。はるか遠い受験生時代に京都の大学を何校か受験し、合格発表をじかには見られないので電報を頼んだのだが、そのうちの一枚の文面が味わい深かった。

合格のときが「カモノカワラニサクラサク」（鴨の河原に桜咲く）。不合格のときは「ヒエイノヤマユキフカシ」（比叡の山雪深し）。……おおさすが京都、電報の文面まで格好いいじゃないか！ と京都に憧れのある田舎っ子はそんなところにまで感動したので、よく覚えている。さいわい河原に桜が咲いた。

ただ京都の大学すべてがこの調子だったのかというところなことはなく、同じく京都の別の大学から受け取った電報は「ウカツタヨオメデトウ」で、あつけらかんとしたストレートさに思わず笑ってしまった。「合格おめでとう」ともなにか違う、醸し出されるフレンドリーさの原因は、語尾の「よ」か。

しかし後々少し気になったのは、不合格の場合はどんな文面なのだろう、という点。合格の文面にならうと、まさか「落ちたよ残念だね」とか……？ こうなると、フレンドリーな語尾の「よ」が、むしろ逆効果のような気もするが。

## すし服

五月。ポロシャツの時季になった。大型連休の開始とともにフライング気味に着用していたが、大手を振って着られるようになって嬉しい。十月末までおよそ半年の間、わたしのワードローブではカラフルなポロシャツが大活躍する。職場に着ていく服に迷わずにすんで助かるなあ、と毎年しみじみ思う。

これがない冬場は、「おかしくなければ良し！」ぐらいの意識で適当に服を選んでいく。もしポロシャツのようなものが冬場でもあれば着るだろうし、今の職場に制服ができれば、きつと着たきりになるだろうなと思う。基本的に洒落不精なのだろう。

もういつそのこと、あらゆる外出に対応できるオールマイティな服が開発されないものか。近所のスーパーへも、オフィスへも、冠婚葬祭も、それ一着で対応可能な服。夢のようなだ。……しかし現時点では難しそうだ。ステイ-

ブ・ジョブズのように自分のスタイルを貫くしかないのか。

いやいや、いつか見たSFのように小型のホログラム装置のようなものがあれば、どんな服も、さらには髪型も、あるいは顔さえも、自在に変えることができるんじゃないか？

考えると夢はふくらんでいく。便利だなあ、その装置。服の保管場所にも困らないしなあ。実用化されないかなあ。

……でも犯罪に利用されそうだなあ。

たかだか外に着ていく服を揃えるのが面倒というだけで、よくこんなしょうもないことを考えている。雨に濡れずに通勤できる繭玉的な移動装置が開発されないか、とも雨や雪の季節はよく思っている。基本的に不精なのだ。

## フォークダンスの思い出

先日、高校生たちとすれ違おうと「体育祭」「練習が」という単語がちらりと聞こえた。そんな時期なのか。

わたしの母校では学校祭は九月だったが、体育祭の裏目玉はフォークダンスだった。“フォークダンス”というと、若い男女が手に手を取り合って照れつつ踊る恋のメロディ的なものをイメージしそうだが、母校のそれはそんな甘いものではない。四曲連続、しかも休憩なし。プログラム構成に異を唱えられない（唱えることも思いつかない）生徒たちは粛々と従っていたが、よく倒れる生徒がいなかったものだと思ふ。

曲目は年によって変わるが、うち一曲は固定で、毎年“ハーモニカ”。陽気な曲調に合わせ輪になってひたすらステップを踏む、体力の要るダンスだ。なぜかこれだけは母校の伝統らしく、事前練習でも体育教師の熱の入りが段違いだった。「ホップ、ホップ！ ほらもつと

膝を上げて！」とかったるそうな生徒たちに活を入れる。体育教師の声を今でも思い出せる。

もつとも、ではその青息吐息ダンスを自分が体験したのかというところ、実はノーだったりもする。放送部だったわたしは、過酷なダンスに翻弄される生徒たちを見ながら、日陰のテントの中で音響を担当していた。司会役は他の部員に任せて常に音響担当だったので、演目に合わせて音源を換えるだけ。正直なところ楽なものだった。あれこれ面倒なこともあるけれど、今この場に座っていられるだけで、この部に入った甲斐があったなあ！ という満足感と涼しさが、体育祭の思い出だったりする。

## 脚立がこわい

音信不通(三十七)

この休日に天井の蛍光灯を交換して、一日の仕事をやり終えたような気分になった。

結構重度の高所恐怖症なのだ。おかげで脚立に乗るのが怖い。それはもう実に怖い。こわごわ一段ずつ足をかけて、おっとつと、とバランスを取る。それから天井の照明具に手をかけて、もう一度心を落ち着ける。その後、半目になって平常心を保ちながら交換作業をおこない、へっぴり腰で降りてくる。……作業頻度はそれほど高くないが、もうこれだけで汗びっしょりだ。今の住居に移る際、部屋数が増えたので器具類をあれこれ買い足しをした。その際なぜ昔ながらの吊り下げ型の照明にしなかったのか、そうしたらもつと低かったのにと悔やむ。

どうも自分が怖いのは、高い場所にいることが自覚できる場所で、掴まったり縋ったりするものがない不安定さなのだと思う。自力で降りられない高所に長時間留まるのも大変怖いので、遊園地の観覧車はおそろしくてと

ても景色を楽しむ余裕はない。そんな自分が絶叫マシン好きというのは何か矛盾しているような気もするが、人間は矛盾の塊なのだろう。

ちなみに、買い足すには先立つものがなかったので、我が家はリビングにしかエアコンがなく、本の部屋は夏場はとても長居できない。猫たちは室温が選べてありがたいようで、涼しい部屋と熱帯部屋を行き来している。二本足のしもべが震えながらおこなう脚立での作業を、涼しい部屋で涼しい顔でしらっと眺めていた。

## 映画のはなし

音信不通（三十八）

七月のことだが、めずらしく映画を観に行った。封切られたばかりの新海誠監督『天気の子』。映像と音楽の美しい作品で、満足して帰った。カップルの姿もそこそこあって、そうね恋人同士で観るのにいい雰囲気映画よねとなんとなく納得。

それからしばらくして、『デートで初めて行った映画は何ですか？』（岩崎書店刊）という本を読んだ。カフエオナー、映画監督、編集者……さまざまな年代・職業の人たちが語る映画と面白い出。くすぐったく甘ずっぱいエピソード満載だった。

初めて恋人（ぼい）相手と行った映画は、『シン・レッド・ライン』テレンス・マリック監督。当時親しかったサークルの先輩と。相手が好きな監督で、二十年ぶりの新作と聞いて出かけたのだった。しかし中身について予備知識がなかったのがまずかった。太平洋戦争のガダルカナル島の戦いを描いた戦争映画だったのだ。一七〇

分の間、風がなびき、草がそよぎ、南の島の濃い緑と静けさの中で、人がバツタバタ死んだ。なにか無常感に駆られ、映画館を出た後ふたりで川沿いを延々と歩いた。無言だった。

今にして思えば、明らかな選択ミスだった。もう少し話の弾む楽しい作品をチョイスすればよかったのだ。あるいはミス研らしく、ミステリー映画か？

……ここまで考えて、いやそれもどうかと思ひ直す。『ユージュアル・サスペクト』を違う人と観たとき、お互いの推理が食い違つてなにやら険悪なムードになったのだった。あんたのロジックはおかしい、いやそれはそちらだ云々。譲れないものがあつた。若かつたのだろう。今となつては、それも思い出。

## 魔女と靴下

音信不通(三十九)

欧米では「魔女の一撃」と言うらしい。いわゆるぎつくり腰のことだ。Hexenschuss。この言葉を知ったときは「おお、なんだか格好いい響きだなあ」と中二ころをくすぐられはしたが、実感はなかった。しかし、いざ自分がその一撃を受けてみると、……なるほど、これはたしかに魔女だ。

きっかけは特に何ということはない動作だったのだ。当日は集団演武のリハーサルがあった。朝から鈍い痛みはあったもののその程度の違和感はよくあることだったし、進行役だったので、あまり気に留めずに動き始め、刀を持った手を振りおろすと同時に片足立ちで踵を蹴りだした。ポーズを取ったところで、ズギヤツニときた。雷に打たれたような、あるいは電撃が走ったようなという形容がぴったりの一撃。ぎつくり腰は初めてだったが、「これはやってしまった」と瞬時に悟った。そのぐらい強烈だった。

それからしばらく、よちよち歩きの生活を送っている。靴を履くのも、洗面台で口をすすぐのも、自転車の鍵を外すのも、あらゆる腰を屈める動作に支障をきたし、不便きわまりない。そして、不便を通り越して存在に疑問を感じるのが、靴下。ふにやふにやと伸び縮みして、自分の手で引っぱらなないと装着できない、このアイテム。……なくなつてしまえばいいのに。心の中でつぶやく。

靴下にはひそかにこだわりがあったのに、瞬時にして不要物に宗旨替えをさせてしまう。ぎつくり腰とはおそろしい。

## 湯たんぽのはなし

音信不通（四十）

朝夕が冷えるようになってきたので、湯たんぽを導入した。わたしではない、猫たちの話。毛皮を着ているので暖かそうに思うが、猫たちは案外寒がりだ。特に年上の方の猫はもう高齢で活動量も少なくなってきたので冷えるのか、よくデスクトップの筐体が載っているデスクに飛び乗って、ぴったり身を寄せている。……精密機器に動物の毛はよろしくないのです、本当はやめて欲しいところだが。

一昨日から使い始めた湯たんぽにも、刺身のネタのようにきつちり上から納まって鎮座していて、ちよつとやそつと触れたぐらいでは動こうとしない。なるほど、では膝の上に湯たんぽを乗せれば、わたしの膝からずつと動かずについてくれるのだろうか。これでおさわりし放題ではないか！ そう思って自分の膝にまず湯たんぽを乗せて、その上から猫をオンしてみたが、残念ながら不安定で落ち着か

ないらしく、このアイデアはすぐに消えた。

このとおり、導入以降湯たんぽさんの人気に嫉妬を禁じ得ない日々だが、暖をとることに關しては、わたし自身はあまり不自由していない。何しろ、天然湯たんぽが二つもあるのだから。カバーは要らず、お湯を替える手間もない、温度は一定に保たれて火傷の心配もない。もさもさと毛が生えていてやわらかい。しつこく密着しすぎると少し嫌そうに身じろぎし、うにやあと鳴く。何か気に入らないときどき爪を立てる。油断がならない、かわいい湯たんぽ。

## 春の帽子

音信不通(四十一)

クリスマスケーキの季節が来た。

わたしが小学校に上がったばかりの頃、母はいつも一冊のレシピ本をお手本にしてお菓子を作ってくれ、わたしはそれを眺めるのが好きだった。苺のケーキ、ババロア、アップルパイ……美味しそうな洋菓子の写真で溢れたその本を、何度見ても飽きなかったものだ。

中でもわたしの心を捉えて離さなかったのは、「スプリングハット」……*Spring* 春の帽子、と名付けられた、丸いドーム型のケーキの全面に花を横した。ピンク色や白のクリームが絞ってデコレーションされた華やかなものだった。今なら「映え」というのだろうか、幼いわたしはその美しさに夢中になり、作ってくれるようことあるごとに母親にねだった。ねえ次はこれを作って、お願い、一生のお願い……。

最初は渋っていた母親も、わたしのあまりのしつこさに

根負けしたのか、ついに作ってくれることになった。しかし、わくわくしながら迎えたケーキは、想像したものとは大きく違っていた。白いドームにトゲがまばらに植えられた、さびしいサボテン。あれ？

あの華やかさはどこへ？

……大人になった今ならわかる。なんと手のかかるものを頼んだことか。色味を変えながら隙間なく均等にクリームを絞っていく、果てのない単純作業。母はきつと大変だったのだ、とても。内心の落胆を隠して喜んでみせたあとき、わたしは優しい嘘というものを身に付けたように思う。

手作りケーキと聞くと、今でもよくこれを思いだす。半分だけ春を纏った、あのお手製の帽子を。

## ママチャリ

自転車を買替えた。

五年乗った愛車は自転車通勤をはじめるときに買つて思入れがあったのだが、ある夜職場を出て漕ごうと踏み込んだ瞬間、メリメリバキと不吉な音を立てながら割れた。パーツが落下し、前に進めなくなつてしまった。修理に持ち込んでみたものの、泣く泣く廃車。

さて、次はどんな自転車にしようかとあれこれ考える。前回は見た目にこだわった。車体の色は好みのダークブルー。ある程度の走行にも耐えうる、少し大きめの変速機付折りたたみ自転車。やはりここは非ママチャリで攻めるか？

……いやいや待て、格好良さで決めてしまつてよいのか。決断しかけて考え直す。シュツとした自転車はだいたいの片側スタンドだが、あれは安定性が悪い。前の自転車は最後には常に何かによりかからないと立っていられな

つた。もう少しししゃんと自立してもらわないと。駐輪場ドミノ倒しを起こしたくない。

荷物が多くなりがちだから、前カゴは付いていた方が良い。いざというときの備えに荷台もあった方が便利だ。大物を運ぶことがあるかもしれない。ミカンの箱買いか。経験はないが。

ここは優先順位を見直す必要があるだろう。車を運転しないわたしには、自力での移動・運搬手段は、自転車しかないのだから。見た目より実用性。そうするともう答えはひとつしかない。安全で、使い勝手がよく、乗りやすい、お母さんの味方。

人はこうしてママチャリに乗る。これでわたしも立派なママチャラーだ。

## 歳月のはなし

十年ぶりに県外のあるお寺に仏像を観に出かけた。前回はある人で行った場所。心残りのある別れ方をした相手ですれきり思い出さないようにしていたのだが、節目でもあったし小さなきっかけも重なって、もう一度戻ってみようと思った。

前回は車だったが、今回は電車。隣県ながら鳥取からは案外遠い。田園風景を走るのでかなローカル線や私鉄を乗り継いでたどり着いたそこは、驚くほど変わっていないかった。鎌倉時代に建立され長い年月を経たこの場所にとつて、十年など瞬く間の出来事なのだろう。

靴を脱いで板の間の本堂へ上がると、ほとんど人のいない堂内はあのとときと同じようにしんとした静けさに満ちている。薄暗がりには佇む黄金の阿弥陀如来を見上げながら、長い間じっと座っていた。色々伝えたいことがあった気がした。後悔ばかりだった。ひどい、とか、どうして、

とか、当時自分の中で何度も繰り返した言葉があった。けれど、久しぶりに記憶の底に降り積もったものをすくい上げてみると、当時私自身を傷つけていた強い感情はかたちをなくして指の間からさらさらこぼれ落ちていって、手の中に残ったのはもつと穏やかなものだった。

……そうだ、ありがとうと云いたかったのだ。とふっと思つて、流れた歳月を実感する。これで良かったとまでは言えないけれど、もらった温かい記憶はわたしの中の柔らかな部分に今も灯っている。そのことに気づけるようになるのなら、年をとることは悪いことではないのだ、と思えた。

## 片想い

### 音信不通（四十四）

わたしの話ではない、猫の話。

猫を飼い始めて十三年、二匹と暮らすことになって十年目を迎える。後輩猫のあんずは、先輩のチャイに片想いをしている。後をつけて歩いたり、毛づくろいをしてあげたり、びったり寄り添って眠ったり（チャイが起きているときは許さない）、時差を利用した偽装添い寝）。傍から眺めていると大変いじらしいが報われたことはなく、いつも邪険に追い払われている。もともとわたしと一對一の関係だったチャイは、ふたりぐらしに後から割り込んできた若い娘が目障りでしょうがないらしい。しぶしぶ存在を許してはいるが好意は抱いていないようで、好きの不等号は常に同じ向きのままで。

一方、このあんず。世界は「お姉ちゃんとおたし」で完結しているのか、飼い主であるわたしのことは温熱機能付き自動給餌機程度にしか認識していないようだ。たまたま

傍に座ったあんずをそろそろなでると、電気でも走ったように飛び退る。まあ、わたしだって、冷蔵庫から手が生えて急に巻き付いて来たら驚いて飛び上がるだろうが、……しかし、あんまりではないか。

もつとも、このあんずが唯一わたしに能動的にすり寄ってくる状況も存在して、それはチャイと仲良くしているときだったりする。膝の上でくつろぐチャイとわたしの胴体のわずかな隙間にぐいぐいと入り込み、甘えたしぐさをしてみせるあんず。かわいい。かわいいが、これは要するに本命に嫉妬させるために当て馬といちゃついでみせているのでは……と少し複雑な気分にもなる。

## 黒ときどき青赤

### 音信不通(四十五)

この春、職場を替わることになった。異動はつきものの仕事なので、それ自体は「ああそうなんだ」としみじみしながらも、粛々と受け入れる。立つ鳥跡を濁さぬために残務整理がひと苦労ではあったが、古巣ではあるし、土日のある生活に戻る気安さもあった。

ただ、困ったことがある。実家方面からのある攻撃をかわせなくなるからだ。

ひとつが、「正月は帰ってきてゆっくりしろ」攻撃。こちらは、年末年始の本の回収当番に誰よりも早く立候補することで対処した。この五年間様々な気遣いも辞退してその役を譲らず、目論見どおり大晦日夕方の帰省に成功している。

もうひとつが、「LINEをはじめろ。テレビ電話で会話しよう」攻撃。何が嬉しくて、実家とテレビ電話をせねばならないのか。電話やメールのいいところは顔が見えな

いところなのに。こちらは、「LINEを始めると職場から四六時中連絡が来て、気が休まらないから嫌だ」と出まかせを並べて頑なに拒んできた。ちなみに、土日の突然の来襲予告も「今週末は仕事である」と断りつけている。それやこれやで、実家の人々はわたしの職場を超絶ブラックなけしからんところだと思いついでいる。県外へ帰省する人間を大晦日までこき使い、SNSを使って貴重なプライベートの時間を侵食する。そして、週末はいつも仕事。完全に故意ではあるが、いわれなき悪印象を与えてしまったことはまことに心苦しく思っている。

さて、今度からどう理由をつけようか。シフト勤務から、暦どおりにブラックでときどきブルー(とレッド)の生活で。

## さよなら元気で

四月も下旬。制服のティーンエイジャーたちが集う場所に戻って、一か月が過ぎようしている。エプロン姿で階段を駆け上がった日々から、「センセイ」と呼ばれる暮らしへ。今の学校は規模が大きくその前の学校とも大きく違うけれど、この場所を満たす独特の空気は共通している、やはり少し懐かしい。

学校にいた頃に出会った生徒たちを、前の職場でちらほら見かけることがあった。仕事帰りに資料を探しに来いたり、子どもと一緒に読み聞かせの会に参加してくれたり。ときには同じ職場の仲間として迎えたり。

卒業おめでとう、さよなら。元気でね。と見送った若者が、立派な社会人になり家庭を築いているのを見ると、やはり感慨深いものがある。見送って、見送って、さよならばかりが積み重なる場所だと思っていたけれど、時が経てばそんな再会もあるのだ。あるいは、この春までの職場で

接していた子どもたちにも、いつか学校で再会することもあるかもしれない。そうしてまた、おめでとう、さよなら元気で、と送り出していくのだろう。

いい話風になってきたところに唐突だが、五年ぶりの学校現場で何が一番嬉しいかというと、「君たちのお母さんより年上です」と言い切っても無理がなくなってきたことかもしれない。年齢について訊かれるのが面倒で、十年ほど前からそれで通してきた。言い始めた頃はだいぶ頑張らないと難しい年齢差だったが、自然になってきた。コツは、毅然と言いつけること。そして、異論を認めないこと。

## 駅前通りの憂鬱

音信不通（四十七）

新年度が始まって二カ月。職場にもようやく慣れてきて、生活習慣がだいたい固まってきたように思う。異動とコロナ禍が重なったため、自分の生活や行動もあれこれ変わったことが多い。

土日が休みになり、遅番勤務がなくなり、エプロンをしなくなった。……これは前にも書いた。子どもの本をあまり読まなくなった。本の感想をSNSに書くことをしなくなった。読んだ本について会話したり薦めたりする機会が増えたので、自分の中の欲求が満たされたのかもしれない。

オムライス巡りをしなくなった。これは単に外食を控えていたからで、卵への愛が減衰したわけではない。もう少し状況が緩めばそろりそろりと始めたい。

朝が早くなった。ジョギングや散歩の人々とすれ違いながら自転車で疾走する。もともと早起きなので早朝通勤は

苦にならないし、暑さもましなので快適だ。

一番変わった（てしまつ）たのは、駅前から続く通りがまったく油断のならない道になってしまったこと。朝は問題ないが夕方はいよいよもので、終業後の約二時間は魔の遭遇タイムだ。まず信号待ちで生徒の集団に出くわし、走ってはぼろぼろ連れだつて歩く生徒たちを追い越し、下手をすると店に入っても顔を合わせる。職場を一步出れば座敷わらしに戻りたいわたしとしては、ドラえものの“いしころ帽子”が欲しいところだ。

ちなみに、ポロシャツ星人なのは変わらない。二週間毎日取り換えて着ても余るぐらい持っているので、この時期から夏の終わりまではポロシャツ星の使者を務めつつける。

## 二 子どものわたし、大人の私

先日帰省する電車に乗り遅れそうになり、ひさびさに全力疾走した。早朝の駅の構内に走り込んで階段を駆けあげ、滑り込みセーフ。車内ではずむ息を整えながら、そういえばこんな全力疾走、大人がやっているのは見かけないなあとと思う。子どもの頃は何かにつけて走っていたおぼえがある。早く遊びに行きたくて走って下校していたし、習い事に行くときも自転車の姉に併走していた（今思えばなんたる不平等）。風を切って二本の足で全力で駆ける。スポーツではなく移動手段として。いい大人には体力も続かないし、少々人目も気になるころだ。

実家に着いてから食事の支度を手伝った。揚げ物をする母親の後ろ姿を眺めながら、出来心で一つつまんでみる。小さな頃はよく母親が作るドーナツやクッキーをつまみ食いしていた覚えがある。作りたてのおいしさとつまみ食いのスリル感。本来のタイミングより早くより多く食べられるお得意感。大人になって自宅でもそれとはもはや異なる「調理中の味見」としか呼べない気がする。

実家に戻るとそんな子ども時代の自分とのギャップがちらほら感じられて、少し面白い。極めつけは、「あんた

こんなにくれたのよ」と母親が取り出した「なんでもおてつだい券」という手作りチケットだった。発行者はもちろん私。本人としては、おさらあらいでもかたたきでもいいよ、という程度の気持ちだったのだと思うが、「なんでも」という言葉のスケールに今となっては打ちのめされる。なんでも！

## いつも、何度でも

読書記録をつけている。仕事柄本を薦める機会が多いのだが、読み終えた本は端からぼろぼろと脳みそからこぼれ落ちて、もはや先週何を読んだかすら忘却の彼方だ。もともと自信のない記憶力は年を重ねるともにすり減ってゆく一方なので、外部的な記憶装置に頼ることにした。

ツールは、読んだ本や持っている本を登録してネット上で管理できる、いわゆるウェブ本棚サービスを使用している。トピックを立てて情報交換したりユーザー同士で交流するようなコミュニティ機能は使っておらず、本当にただただ読んだ本を記録していくだけが、備忘録としてはじゆうぶんだ。これで「最近なんか面白かった本ないですか？」という頻出質問にも耐えられるし、ものぐさマンガ読みあるあるの痛恨のダブリ買ひも回避できる。完璧だ。と思ったのだが。

先週末、なんとなくジャケ借りした本を数冊持ち帰っ

た。どれも面白く読み終えたが、どれ記録を残そうかと登録しはじめて驚いた。すべて数年前に読み終えた本だったのだ。軽くショックだった。読み始めてみて「ああ、これは読んだことがあったな」とやめることはよくあるが、本当になにひとつ覚えていなかったのだから。「題材は面白いがキャラクターが少し弱い」と抱いた感想とまったく同じことを書いてさえた。

なんだか悲しかったので、こう自分に言い聞かせる。逆に考えるんだ。いつも、何度でも、初めてのよう楽しむ。それもまたよし、と。

## 拾うひと

しばらくぶりに実家の別宅に猫が実ったと聞いた。毛が長く顔も横長な白い毛並みの洋猫だそうだ。ここには定期的に猫が実る……つまり猫がどこからともなく現れて居着いてしまう。ほとんどは子猫だ。ノラ猫が暮らしやすいのだろう。人間に追い出されることはないし、自然あふれる環境で食料にも困らない。

「警戒心が強くてまだそばに寄れない。顔もようわからん」……この別宅を仕事場に行っている父はぶつぶつ言う。父には困った習性がある。さ迷っている動物をなんでも拾ってきってしまうのだ。猫、ニワトリ、ウサギ、ハムスター……幼い頃の我が家は迷い〇〇で賑やかだった。他にペットを飼っているから、とか家族がいい顔をしないかも、とかそんなことは父は考えない。とにかく拾う。そしてそのためらいのない親切心ゆえか、拾われた動物たちは父にとっても懐く。毎日餌をあげるのも、散歩に出かけるのも父で

はないというのに。傍で見ても何故そんなに好かれるのかよくわからない。あれはもはやひとつの才能だとすら思う。

「連れて帰らへんで、うちにはもう猫がおるしな」……父は言う。一応わかっではいるのだ。しかし、筋金入りの拾うひとである彼のことだ。様子を見ているうちに構いたくなり、構っていれば情が移り、自宅に連れ帰るに違いなし。きつとこの次帰省したときには、さも当然のように家族の一員に収まっているだろう。そして、父はいつものようにいちばん慕われるのだ。

## おみやげと替え玉

信不通（五十一）

朝夕の空気が冷たくなり、日赤前の歩道に銀杏がぼつんぼつんと落ちている、秋。秋の気配を感じると、母が入院していた幼い頃を思い出す。当時祖母や姉とバスに乗って遠くの病院まで通った、と初期の号に書いたが、それに関して最近気づいたことがある。

京都の大病院に転院した母のもとへ、まだ幼いわたし達姉妹はほとんど行くことはなかったが、足繁く通う父から、代わりに何度かおみやげを渡された。「ほら、お母さんからやで」と渡されたそのほとんどはぬいぐるみで、事態の深刻さを理解できていなかったわたしは無邪気に喜んでものだ。

けれど、よくよく考えるとこの話にはおかしいところがある。転院後は大きな手術の後で、意識のない状態が続いていたと聞く。そもそも、あれを母親が買えたはずはないのだ。では、誰が？

消去法で推理するに、あれを選んだのは父だったのだから。道理で、おみやげはことづけてくれるものの、一生懸命書いた手紙には返事をくれないし、動物の種類が違うだけで毎度ほぼ変わらない、なんとなく無造作なチョイス。カーディガンを素肌じかに着せてわたしを登園させた父の姿が見え隠れする。帰りの道中で買ったのだろうか。もっとも当時のわたしはまったく気づかず、「母」からのおみやげを大切にしていた。一番気に入っていたのはコアラの小さなマスコットで、肌身離さず大事に持ちすぎたせいで、ある朝味噌汁の中に落とした。ずいぶん悲しかった覚えがあるが、茶色くなったそのマスコットは、今もわたしの身近にある。

## 拾うひと その二

実家の別宅に猫が実ってもうすぐわが家の一員になりそうだと書いたのはほんの二日前だというのに、何ということだろう。彼らはまた猫を迎えたいらしい。しかも子猫だと聞く。数時間おきにミルクをあげないといけない、まだ目の青いとびきり小さな子猫。送られる写真の数々からは可愛さがあふれ出ている。何を撮影しても奇跡的に不細工に撮れてしまうため「不細工カメラマン」と家族から呼ばれていた母は、突然才能が開花したのか(あるいは才能が枯渇したのか)称号を捨てて、愛くるしい写真を毎日のように送りつけてくる。

名前は、神無月にやって来たから、カンナ。一年前の五月に迎えたトラ猫は、さつき。ではこれが十二月ならシワスなのか、それはさすがに反対したい。とは言うものの実家で最初に飼った猫はその名も「おたふく」だったので、父親の命名センスに比べたら月の法則に則った方がいく

らかましかもしれない。

さて、このカンナ。実は前回書いた長毛種の猫の子どもだと言う。兄弟の多くは父親方の向かいの米屋に引き取られ、カンナだけが別宅の主人である父の手に委ねられた。

一方、当の母猫はといえば。子猫たちの将来を考えてか彼らを養子に出すことには抵抗しなかったものの、自分は人間の庇護下に置かれることをよしとしなかったようだ。食糧事情が改善してふさふさと美しい毛並みになった彼女は、野生の貴婦人として、悠々と、自由に、別宅で生きているという。故に、名前は無い。

## 流星群

### 音信不通（五十三）

先日出席した科学の本の講座で、今年二〇二〇年のふたご座流星群は十二月半ばに極大を迎えると聞いた。

星には疎いが、一度だけ夜中じゅう流星群を見ていたことがある。しし座流星群。三十三年の周期で大出現し、流星雨を降らせるといわれる。世紀末も近づいたある年、大学生だったわたしは、所属するミステリ研究会有志の観測会に参加していた。UFOの方のミステリ研ではないし、特に天文ファンがいたわけではない。ただみんな暇だったのだろう。「三十三年に一度」の触れ込みに乗せられて、じやあ見物しようかと思うくらいには。

当日夜。推理小説好きの暇な学生たちが集まった。観測場所にはわたしが住むマンションの屋上が選ばれた。キャンパス最寄りの近鉄K駅に近く、田んぼに囲まれた立地。星を見るのに絶好のロケーションだったのだ。

十一月下旬の夜は寒い。天候はあいにくの薄曇りで、お

目当ての流星雨はぼつぼつとしか流れない。しかしせっかく集まったのだから、ミステリの話でもしようじゃないか。わたし達は自動販売機で買った温かい飲み物をカイロ代わりにしながら、語り合った。あの新作は読んだか。この展開についてどう思うか。そもそもミステリというものは、……。

それはなんと楽しい時間だったことだろう。

〇〇座流星群という言葉を聞くとときどきあの夜を思い出すことがある。晩秋の夜の空気。掌の中の缶コーヒーの温もり。仲間たちとの声をひそめたお喋り。みんなとにかく暇で、とにかく若くて、そしてミステリが好きだった、そんな夜。

## あいやし

年末が近づくと「よいお年を」という挨拶があちらこちらで飛び交う。ひと足早くお正月休みに入る同僚と、習い事の仲間と、馴染みのお店のご店主と。交わし合ういつもの挨拶。

ずっと以前は日常にあふれるそんな決まり文句が苦手だった。量産型の言葉には気持ちが悪くもっていないような気がして、口に乗せることをためらっていた。まだ鳥取に来る前、大学を卒業してすぐの頃だ。未熟で愛想のない若者だったと思う。

あれから十数年経ち社会人生活も長くなると、さすがにそんな青いことは考えなくなる。電話口では何はともかく「いつもお世話になっております」、飲み会の翌日には「昨日はお疲れ様でした」、と上手ではないもののそれなりにつるつると決まり文句が口をついて出る。

そして自分が使う側になると思う。気持ちが悪くもつてい

ないということがあるだろうか。「おはようございます」も「お疲れ様です」も、職場で利用者の方に対してもっともよく使った「ありがとうございます」にだって、その決まった数の音に自分の心がきちんと乗ればいいと思いつながら発していた。親密な相手への強い愛情でなくとも、今この場だけの関係であったとしても、わたし達は言葉を贈った相手が心穏やかにこれからの時間を過ごしてほしいと思っている。そのささやかな願いにも似た思いを決まり文句に託すのだ。

今年も帰省しないので、毎年あわただしく投函する年賀状をいつもより丁寧に書いた。コロナ禍の中、多くは都市圏に住む友人達とはたしていつ安心して会うことができなのか、今は見当もつかない。それでも「また会おうね」「元気で」と祈りながら。

これを読む皆さんもどうぞよいお年を。そしてまた次号。

## 音信不通(五十五)

### 猫はカカオを食べない

チョコレイトが好きだ、毎日食べてもいいぐらい好きだ。だからこの季節は楽しい。世界が華やかでかわいらしいチョコレイトで溢れている。

チョコレイトと一括りに言っても、オースドックスなビター、ミルク、ホワイトの三種類以外にも今は新しいものが登場しているようで、見慣れない色・呼び名のチョコレイトを見かける。調べてみると原料や製法が従来と異なるらしい。なるほど。

ひとつはブロンドチョコレイト。ホワイトチョコを焦がしたような香ばしい味わい。そしてもうひとつがルビーチョコレイト。ルビーカカオという原料からできており、ベリーのようなフルーティな酸味が特徴だという。天然のピンク色がかわいい。

しかし新顔のカラフルな彼らは、実はあまりわたし好みではない。だって、何だかせっかくのチョコレイトを食べ

ている実感がない……：ような気がするのだ。してみると、わたしが好きなのはチョコ全般と言うよりは“カカオ”なのだろう。近年はカカオ分の比率を明記したビターなものも多く出回るようになり、カカオ好きとしては嬉しい限りだ。ちなみにストライクゾーンは七五〇八八%。これを超えるハイカカオはもはや薬に近い気がする。

ちなみにチョコレイトを好きな理由はもう一つある。猫と暮らして以来ほとんどの食物を心穏やかに座っていただけでなく、猫パンチやタックルを警戒せねばならなくなつたわけだが、そんな食いしん坊の猫たちもチョコレイトには手を出さないからだ。猫はカカオの魅力にまだ気づいてない。幸いなことに。

猫はカカオを食べない。

## バナナ牛乳

ああ疲れた、でももうひと頑張り。というときバナナ牛乳を買う。わたしの中で特別な位置にいる飲み物。最近お気に入り、疲れたときはこれを飲んでいきます。そう手紙に書いてきた友人がいた。

高校時代の仲のよい友人だった。本の話、マンガの話：他愛のない話題ばかりだったが、喋っているとき時間を忘れた。高校卒業後「声優になる」と言って誰にも相談せず都会の専門学校に入学し、親の援助（というか賛同）を得られなかった彼は、新聞奨学生をしながら専門学校に通っていた。便利な電子ツールを持たない同士手紙をかわずと、「常に眠い」「お金は貯まるが使うところがない」などとハードな日々を窺わせる文章が並ぶ。そんな彼が日常を綴った中に「最近、疲れたときにバナナ牛乳をよく飲んでいきます」という妙に印象的な一文があったのだ。バナナ牛乳。似合うような、そうでないような意外な気分がした

ものだ。

彼は随分大変だったろうと思う。専門学校を卒業し劇団に入ってから、一度だけわたしの前で歌ってくれたことがある。公園で身振り手振りを交えて熱唱する姿を眺めながら、……うーん無理だよなあと思ったのを覚えている。涼やかな目元。長い手足に小さな顔。舞台映えるスタイルに恵まれながら、彼は大変な音痴だった。かなしいほどに。

夢を追う日々はどこで折り合いをつけたのだろうか。いま彼は故郷の町で働いている。相変わらずアニメもゲームも好きだと聞く。

もはや定番商品としてファンを獲得しているのか、バナナ牛乳も周りから消えてしまうことはないようだ。だから、そうだ頑張らないかと思ったとき、わたしはまたバナナ牛乳を買う。